
凡人少女は世界を臨む

桃瀬ゆえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凡人少女は世界を臨む

【Nコード】

N5502H

【作者名】

桃瀬ゆえ

【あらすじ】

『人間、誰だって変革願望はある。少なからず。』そんなことを客観的に考える様な不運な少女は、見慣れた現代とは打って変わった異世界の空を見上げて。叫んだ、

第一話：変革と変質の違いを答えなさい。（前書き）

異世界トリップとなります。苦手な方はご注意ください。

第一話：変革と変質の違いを答えなさい。

人間、誰だって変身願望はある。少なからず。それは時には変革願望とも言い換えられて、「こんな職業につきたいなあ」から、「こんな世界だったら良いのになあ」などなど。

人間、誰だって異なるモノへの憧れがある。期間的なものにしろ、継続的なものにしろ。お前等は意思が薄い？中だるみも大概にしろ？真剣に将来を考える？

（正直、耳にタコですよ。）

（口で言われたところで間近に迫ってる将来とやらの実感が持てない場合は、どうすりゃ良いかこそを教えて下さいよ先生。）

なんてことをぶつくさ考えている佐々木樹笹という少女にだってある。ちなみに彼女は小学生の頃、『自分の名前の由来を知ろう！』なる授業が大嫌いだった。というか由来を聞かれること自体が嫌いだ。「ささき・きささ」言葉遊びだ。これは両親も笑って認めている。

話は逸れたが、人間、変化への願望がある。変化が無い日常は退屈であるし、ただ生きているという感が否めない。で、あるから。ちよつとした変化にだって気付けば心躍るものだけれど、

「こんな劇的变化は望んでおりません。断じて。決して。一ミリたりとも。」

一息で言い切って樹笹は俯いた。気を落としたというよりは握った拳がブルブル揺れていて、怒りに震えているだろうことが一目で分かる。樹笹は自分の服装を見た。見慣れた、制服。学生は学生という職業なのだということを、痛感するほど足繁く通った校舎があるはずだったのだ。制服を辿って、実用性を重視してローファアを避けた運動靴。その、下に。

あの煤けた廊下は何処へいったのか。（生い茂った草を踏むなんて久しぶりですよ、）

あの埃っぽい空気は何処へいったのか。（緑の匂い。）（ていうか登って来るな蟻！）

「世界丸ごとの変化なんて望んでない！！」

声が登った空は薄い緑色だった。雲は白かったけれど、青い空は欠片も見当たらなかった。（私の平凡を返してくれ！）太陽は見慣れた眩しさだったけれど、声が響いた空間は広過ぎた。清々しいほどの野原だった。

「あー…とりあえず。まあ、ようこそ『この世界』へ？」

部活に勤しむ生徒たちの喧騒はなく、樹笹の声につっこみを入れてくれる友人の姿もなく、ただ一人の男だけが苦笑しながら。そう、言った。

第一話：変革と変質の違いを答えなさい。（後書き）

一体何年ぶりなんだろうか？と自分でも分からない長編に挑戦です。

第二話・話し合うことに名前が必要であることを答えなさい。（前書き）

異世界トリップとなります。苦手な方はご注意ください。

第二話：話し合うことに名前が必要であることを答えなさい。

物語を読めば、その世界に思いを馳せたりもする。憧れが強くなれば、行ってみたいとも思う人間は居る。（本気で、心の底から、願うかどうかは別として。）そんな風に思考をぶつた切ってしまう樹笹といえども本を読めば感動もする。

今まで読んだ本の中には『異世界トリップ』なんてものもあった。

読んだ時の彼女の第一声は「トリップした先に何も用意がされていない場合、一番都合がいいのはファンタジー世界じゃなかるうか」だ。

少なからずそこで過ごさなければいけない時、戸籍が必要であつたならそれが無ければお話にならない。お金も稼げない。住処も確保出来ない。

（都合良く人一人養ってくれる人物が現れる？）（トリップっていう奇跡の後に、更に偶然なんて奇跡の上乗せあるものか。）冷めていると言ふことなかれ。とりあえず佐々木樹笹という少女は妙なところで現実的な人間だった。

そんな彼女が、決して所望していない第一の奇跡。

晴れ渡った空の色は薄緑。だつたら青空ではなく緑空なんて言うべきだろうか。なんて樹笹は思う。

「まあ。とりあえず、ようこそ『この世界』へ？」何故苦笑しながらの疑問系なのだか。問いただしたいところだが、ぼんやりと視線を彷徨わせた彼女に声をかけた男のベルトには一振りの長剣。こ

れで人間一人一人にIDとかが必要な世界だったなら、この人物は相当なアナログ人間ということになる。

「どちら様？」

「…第一声が「ここは何処ですか？」じゃない『流れ星』ってのも珍しいな。」

苦笑を深くした男をじつと見る。（あ、そばかす。）笑い方にはいかにも人が良さそうに見えるけれど、『この世界』へだの、『流れ星』だの、そもそもこの場所からして分からないことが多過ぎた。じつと、見る。剣なども持っているのだから気が抜けない。いざとなつて逃げられるかは分からなかったけれど、走り出せる様には足に力を込めた。（雑に括った真っ黒い髪：くっそ、こっちはウスターソース色だつてのに。どうせなら潔く黒が良かった！）思考は飛んでいるが、一応樹笹なりに相手を睨みつけて、じりじり後退していることをここに記しておく。

ザリ。と、彼女の踏みしめる草が微かな音を立てた。ところで、

「ルイン。ルインツエ・カローシュ。」

「……………は…？」

「名前だよ、俺の。聞かれたら返すのが正解だろ。で、そっちは？」

一応不審者であるところの異世界人に（いや、あつちにとつての私もそうなんだろうけど、）あっさりと言乗られて、なおかつこちらでも問われてしまった。問われて、しかも答えるまで意地でも待つからな、と言いたげに腰に手をあててルインという人間は樹笹を覗き込んでくる。それでも立ち位置は詰めて来なかったのは、警戒している彼女への気遣いなのかもしれない。明らかに彼側に警戒の色は無く、何となく先生に問い詰められている様な気持ちになり、「…き、樹笹。」つい。本当に反射的に彼女は答えてしまった。

（教師は教師でも体育だ絶対！）

そんなことを、思いつつ。

第二話・話し合うことに名前が必要であることを答えなさい。（後書き）

サラッと読める様、一話一話が非常に短くなっております。

第三話・かぐや姫は空に帰ってめでたしめでたしだったのかを答えなさい。(前

異世界トリップとなります。苦手な方はご注意ください。

第三話：かぐや姫は空に帰ってめでたしめでたしだったのかを答えなさい。

「樹笹、な。」

初めは「キササ、」と、なんともいえない発音で口にしたルインという名の男は、自分が吐き出した言葉に顔を顰めてしばらくの間「きささ、」「キササ、」「きさサ、」と繰り返した。納得がいかにぐしゃぐしゃと頭を掻いて乱すものだから、括られていた緑の黒髪があちこちデコボコとあられもない姿になっている。飾らない、と言う言葉が樹笹の頭の中を猛スピードで横切ったけれど今それを納得して飲み込んでしまったら盛大に嫌味な気がしたので気付かなかったフリをした。

フリをしつつ、改めてこの『ルイン』という青年を観察してみる。鼻にほんの少しだけ散らばったそばかすが一見彼を素朴そうに見せてはいるけれど、割りに顔立ちは整っていた。悪い印象は受けない。周囲の人間を探せば一人はいそうな気持ちの良い好青年だけれど、どこにでもいる、という表現は少々違う気がする。と樹笹は思う。しっかりとした身体つき。腰に下げた剣が長剣であることから考えても鍛えているのだろう。グローブをしていたから、その掌にマメがあるのか、はたまたそんなものを超越した熟練者なのかは分からなかった。

「樹笹。おし、こうだな。」

名前を連呼されている間も微妙な心境であつたけれど、それよりもしっかりとした発音で、そばかすの無邪気な笑顔を向けられて一瞬、樹笹の体が大きく跳ねる。一応高校二年生であつた樹笹から見て、まあ実習生くらいだろうと思える程には大人に見えたのに、笑

うと随分子供っぽい。(不覚にもときめいた。)今ので警戒が一気に吹き飛んでしまった。

「で、だ。樹笹、何か質問はあるか？」

吹き飛んでしまったものだから。樹笹の口からは初めにルインが想像していた通りの言葉が飛び出した。

「ここは、何処？」樹笹の言葉にルインがにんまりと笑う。まるで良く出来ました、とでも言う様に。思わず待ってました、とでも言い出しそうに。喋りたくてうずうずしてる子供か、と樹笹は思ったけれど黙っておいた。

「ちょっと待ってくれ、な？先に『流れ星』を説明するわ。」

『流れ星』。先程ルインがぼろりと口にした言葉だ。その時の文法からすると樹笹の事を言っている風だったけれど、それが単に降って湧いてきたからという揶揄なのかどうか。彼女には判断が付かない。

「一言で言うと、この世界にはたまーに人が降って来る。」

身長差のおかげでルインを見上げる形になりながら、あんまりな言い方に樹笹はパチパチパチとじつくり瞬きを繰り返した。

曰く、色は決まっていらないが金平糖の様なモノが落ちて来ること。(ちなみに今回はルインの頭で一回バウンドしたこと。)

曰く、金平糖は地面に落ちると煙を上げて人の形になること。(今回のソレが私だったこと。)

曰く、現れた人間は決まってここを「自分の世界ではない」と語

ること。（この『流れ星』は歴史的・一般的に知られていて、だからおそらく異世界間の混ざった文化を『ここ』は持っていること。）

ちなみに「で、ここは何処？」と樹笹が繰り返したら「城下町までは、まだちつとばかり距離がある野っ原。」一蹴された。とりあえず『城下』というのだからお城、ひいては王国があるのだと記憶に書き込んでおく。

「説明されてく内にどんどん嫌な予感がしてきたけども、『流れ星』が空に帰ったっていう前例は？」

「まあ、人生笑って気長にいこうぜ。」

出逢って間もないけれど、心底ルインという人間を殴りたくなかった。

第三話・かぐや姫は空に帰ってめでたしめでたしだったのかを答えなさい。(後

サラッと読める様、一話一話が非常に短くなっております。

いつぞやの話・兄から弟への手紙 1（前書き）

異世界トリップとなります。苦手な方はご注意ください。

いつぞやの話：兄から弟への手紙1

「…え。ルインさんて弟さん居たんですか。」

夜を迎えて焚き起こした火を囲みつつ、思わず樹笹が驚きを声に滲ませてしまったのは無理も無い。とはいえ、その驚きは

「あ？絶対兄弟が居るタイプだって言われるんだけどな、俺。見えんかったか？」

「いえ、」

そう、絶対に兄弟が居るタイプに見える。だから樹笹の驚きはそんなことよりも、手頃な岩の前で胡坐をかいて、せつせと手紙を書いているその姿にこそあったのだけれど。（便りが無いのは良い便り！を、地で行く人にしか見えなかったものだから…。つい。）

「確かに兄弟が居る様に見えます。それも弟なら…冷静で多くは語らずな聞き上手。几帳面時折やや神経質で、もしかしたら偏食家な少なくとも大食いではない、こう、上兄弟を反面教師にした的な性格の気がします。激しく。」

「よし、ちょーっと正座しようか樹笹ちゃん。君が俺をどんな風に見ているかがよく分かりました。」

しかも弟に関する見解が概ね正解だよこんちくしよい！…と、叫びつつもペンを走らせるルイン。意外と、書き始めると分量は多い様だ。（「元気でやってるぜ！」とかで済ましそうな気もするのにな）存外家族思いなのかもしれない。いや、彼が情に厚いことは、こうして拾った樹笹を連れて歩いていることからみても明らかなのだ

けれど。

そして改めて思うこともある。それは昼間エメラルドグリーンだった空の色が、夜は暗い青になるのだとか、月や星がやたらと白くて明るくて、なれるまでは眠るのが大変そうだなとか。（実際、毎日雨戸を閉めて寝る家が多い。とはルインの談。）

そう、ルイン。そのルインに関して改めて思うこと。彼は頻繁に『正解』『不正解』といった言葉を使う。先程もそうであったし、火を起こす際に樹笹が細かい枝木、太目の枝木、少量の葉っぱをそれぞれ区分けして集めてきた時も（着きやすいかな、と思つての。何となくな判断だったのだけれど、）それはもう嬉しそうに「よく出来ました。」なんて言つて樹笹の頭を撫でたのだった。（逆に、マッチが上手く点けられなかった時には「んー残念、」とか言つて指導が入ったし。）

何を書いているのやら、表情をころころ変えながら、時に黒髪をガシガシかいて呻りながら、まだ手紙が書き終わらないらしいルインの姿を見やる。（家族思い。弟思い。）（で、面倒見の、良い人。）

樹笹はルインの弟とやらに会ったことなど当然無いけれど、（彼と同じ様にこの口癖を持っているだろうか、）そんなことをぼんやりと思つた。

『親愛なる我が弟へ！』

お前の敬愛して、敬愛して、敬愛してやまない兄は今、人生2度

目の幸運を拾って旅をしている！こういうえばもうお前は分かってさうだが、2度目の『流れ星』との遭遇だ。あまりに興奮しすぎて、渡りの精霊にこーして手紙を頼むくらいには熱が有り余っている！あ、だから家に帰んのが若干遅れてるのは勘弁して。大目に見てください。ほんとすいません。

で、だ。で、だ！この2度目の幸運は1度目の非じゃないぞ？なんと、女の子だ。ここじゃあ『流れ星』はそう珍しいことじゃあないが、女性の『流れ星』はやれ幸運をもたらすのだの、繁栄の鍵になるのだの言われてるだろ。

そりゃ、それが他世界の技術とかを運んでくれる『流れ星』+子供まで生せるとかって夢のなーいミもフタもない理由からきてるのは俺だって知ってるさ。

でもやっぱ、なんてーかさ。俺は新しい空気とか文化とか大歓迎な奴だから『流れ星』は昔っから好きで……て、いや、そんなんお前は知ってるか。まあとにかく、おにーさんは今唐突に旅に潤いを見出した次第です。

あ、ちょっと待てお前、今「何を悠長に女の子との二人旅で鼻の下伸ばしてるか」的な溜息とかつかなかったか？ついただろ？

馬っ鹿、俺だっていろいろ考えてんだよ。旅慣れてない風な子だし、説明することだって多いし、何より落ち着いて現状を実感させる時間は必要だろ？まあ、どうせ時間が必要なら、ちゃんとした屋根のある場所に落ち着けてやりたいとは思っから……出来るだけ早く帰るよ。つーわけで、我が家に華が到着するのはもうちょっと先だ。お前はお預けだな！彼女の名前も、教えてやんない。自己紹介は会った時にお互いにしろや。わはは。

嘘。嘘半分は冗談だって。時間はちょっと気にしてる。ホント、

急ぐわ。同時期に騎士団入りが決まったつてのに、兄が弟に遅れをとってるんじゃ示しがないしな。

ちゃんとメシ食ってるか？とかはお前に限って要らない言葉だと思っけどな。俺が帰るまで歓迎会はお預けだろ？代わりにメシとか頻繁に誘われてんじゃないか？お前は周りを見るから無下に断ることはしないと思うが、だからこそ心配だよ。俺が居る時はなんだかんだで俺がガンガンに騒いで、お前が諫める役で。ほら、どうか1歩引いた位置がいつもだったろ？じゃあお前が主賓、みたいな形になった時はお前どーすんだろ？と俺は思うわけだ。

騒がしい場所に居るのは嫌いじゃないだろうが、騒ぐのは割と苦手だろ？今まで居た『自警団』とは比べもんにならない『騎士団』で生活することになるんだ。ちょっと、直さないとな。

ま、ストレスは溜め込まない程度に。おにーさんの帰りを待つてなさい。

んじゃな。

いつぞやの話・兄から弟への手紙 1（後書き）

サラッと読める様、一話一話が非常に短くなっております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5502h/>

凡人少女は世界を臨む

2010年10月17日15時28分発行